

## アジアのデザイン文化の比較研究

山車の造形と祭礼文化を中心にして(5)

### COMPARATIVE STUDY OF DESIGN CULTURE IN ASIA

Focusing On The Forms Of Mountain Floats And Festival Cultures (5)

今村 文彦 基礎教育センター 教授  
杉浦 康平 アジアンデザイン研究所 所長  
齊木 崇人 芸術工学部環境デザイン学科 教授  
山之内 誠 芸術工学部環境デザイン学科 准教授  
黄 國賓 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 准教授  
さくま はな 芸術工学部アート・クラフト学科 助教  
長野 真紀 大学院芸術工学研究科 助教  
曾和 英子 芸術工学部プロダクト・インテリアデザイン学科 非常勤講師

Fumihiko IMAMURA Center for Liberal Arts, Professor  
Kohei SUGIURA Director of Research Institute of Asian Design  
Takahito SAIKI Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor  
Makoto YAMANOUCHI Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Associate Professor  
Kuo-pin HUANG Department of Visual Design, School of Arts and Design, Associate Professor  
Hana SAKUMA Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant Professor  
Maki NAGANO Graduate School of Arts and Design, Assistant Professor  
Eiko SOWA Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Adjunct Lecturer

#### 要旨

アジアンデザイン研究所は2010年に開設以来、アジア各地域において多様な形と意味を展開する祭りの山車に焦点をあて、その造形の手法に主眼を置いて調査、研究を進めている。2015年度は、海外研究者を招聘し、靈獣パワーをふんだんに盛り込んだバリ島と東北タイの装飾山車に関する研究成果を発表するシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、この世での生涯を終えた貴人・聖者たちの靈魂を天上世界(宇宙山の山頂にあるとされる)へと送る葬儀山車の造形に、神話的複合獣が登場する。その迫力ある姿・形と、熱気あふれる式典の次第を現地取材の映像を交えて、紹介した。また、「東南アジアの祭礼文化における冠物(かぶりもの/頭飾り)の比較研究」に関する研究会として、「バリ島のジャウク舞踊」の講演と実演を開催した。バリ人の舞踊家による「ジャウクの踊り」の実演を鑑賞するとともに、衣装・仮面・ジャウクの冠の解説等の研究会を行った。

さらに、バリ島の影絵人形芝居「ムナラ・ギリ(乳海攪拌)」についての公演会を開催し、アジア文化が包み込む豊かな造形の共通語法への探求も展開した。

これらの一連の活動により、アジアの山車デザインと関わるデザイン語法(聖山、生命樹、花、聖獣)の広がりや解明する手がかりを得ることができた。

#### Summary

Since the establishment of Research Institute of Asian Design in 2010, we have been proceeding with the research on Asian mountain floats with the particular focus on its design principles. In 2015, the international symposium on decorative mountain floats of Bali and North Eastern Thailand was held at KDU. At this symposium, the design principles of the funeral mountain floats which are thought to be a means of sending departed souls of nobles and saints to the heaven (on the cosmic mountain top) were looked at using visual materials such as documentation video. A seminar as a part of "Comparative study of headdress in the festival culture of Southeast Asia", an event which is Jauk performance by a traditional Balinese dancer with the commentary on its costume, mask and Jauk headdress was held at KDU. Furthermore, Balinese Wayang Kulit event under the theme of samudra manthan was also held in order for us to furtherly explore the basis of Asian Design principles. From all these, we have gained some ideas that lead us to the better understanding of Design principles (sacred mountain, tree of life, flower, sacred animal) of Asian mountain float.

1) 研究目的

アジアデザイン研究所は、2010年度以来、アジア各地に多様な形と意味を展開する祭りの山車に焦点をあて、その「神話的な造形手法」に主眼を置いて調査、研究を進めてきた。

2015年度はバリ島の「バデ」と呼ばれる葬儀山車。もう一つは、タイの北部、ランナータイと呼ばれる地域に伝わる葬儀山車で、ハッサディーリング鳥という聖獣を飾る、珍しい山車を取り上げて、シンポジウムを開催した。「なぜこのような数多くの獣たちが集合し、力を尽くして、徳のある人の魂を天上界へと送りとどけなければならないのか」「霊獣たちが果たす役割は何なのか」「われわれ地上に生きる一般の人びとに、何を伝えようとしているのか」をシンポジウムのテーマとし、霊獣たちの姿が山車全体を支えている理由を明らかにする。

また、アジアの山車の造形原理と深くかかわり、その造形言語を多彩に発展させている「東南アジアの冠物(頭上の山車)の研究が重点的に行っている。その具体的な内容はバリ舞踊「ジャウク」の冠を基軸にして、その神話的・造形的背景となる山、花、生命樹とそのかかわりを明らかにすることを目的としている。

さらに、バリ島の影絵人形芝居の公演を開催し、須弥山(マンドラ山)にまつわる「乳海攪拌」の物語を展開した。

これらの一連の活動により、アジア文化が包み込む豊かな造形の表現語法が再発見でき、アジア造形文化の共通性のひろがりを解明する手がかりを得ることができた。

2) 2015年研究活動 \*1)

2-1) アジアの山車シンポジウム「魂をはこぶ」聖獣の山車

2-1-1) バリ…空飛ぶ「宇宙塔」…バリの葬儀山車

ナンシー・タケヤマ

2-1-2) タイ…「象+鳥」の力で飛翔する…タイの葬儀山車

ソーン・シマトラン

2-2) 「宇宙を戴く」。バリ舞踊「ジャウク」の冠…

2-3) バリ島の影絵人形芝居「ムナラ・ギリ(乳海攪拌)」物語

以下にそれぞれの活動について報告する。

2-1) アジアの山車シンポジウム「魂をはこぶ」聖獣の山車

インドネシア・バリ島で担ぎだされるバデと呼ばれる鳥の翼をもつ壮麗な山車と、ランナー・タイ(タイ北部)の仏教文

化圏で建造される摩訶不思議な複合動物(象と鳥が合体した)の山車、二つの霊獣たちの力を重ねた装飾山車が紹介された(写真1)。ともに死者の徳を讃えて建造された豪華な尖塔をもつ。死者の魂を天上世界につつがなく送りとどけるために創案された、霊獣の意匠が集合する葬儀山車、宇宙塔である。

アジアの山車シンポジウムでは、霊獣たちの飛翔力を借りて垂直に上昇し、天上世界へと魂を運ぶ。この世とあの世を結ぶ魂の移動—輪廻転生が、霊獣たちの援けをえて行われていたのである。霊獣パワーをふんだんに盛りこんだ、バリ島とタイ北部の葬儀山車(写真2)。その迫力に満ちた姿・形と熱気あふれる式典の次第が現地取材の映像を交えてダイナミックに紹介された。

2-1-1) バリ…空飛ぶ「宇宙塔」…バリの葬儀山車

2010年11月に行われたバリ島中部ウブドのプリアタン王家の第9代の王の葬列は、この20年間にバリで行われた火葬儀礼の中では最大規模の、まさに息をのむようなイベントであった。バリでは、火葬儀礼を天界への入り口ととらえ、人生における最大の行事であると考えている。葬列の中心となる大きな山車は、バデと呼ばれる葬儀塔で、その構造は3層から成り、バリの世界観を表している(写真1・2左)。

地下世界は、ブダワンナラという巨大な亀と、バスキとアナタボガという2匹の龍とで表現され、人間が住む地上界と、インド神話の乳海攪拌で表現される天界が、その上にそびえ立つ。バデを際立たせるデザインは、人間と神々を仲介し、王の魂を天界へと導く超越的な力を持つ神鳥ガルダを象徴する、一対の翼である。

今回のバデの高さは25メートル、重さは20トン。7000人の男たちが、交代で肩に担ぎ、王宮から火葬の地まで運んでゆく。

亡くなった王の遺体は、シワ神の乗り物を象徴する、雄牛の形をした柩に入れられた。破壊の神であるシワ神が、火葬の炎で遺体を焼き尽くす(写真3)。解き放たれた王の魂は、強大な飛翔力をもつ神鳥ガルダの翼の力で天界へと運ばれ、アートマン(宇宙我)へと導かれることになる。

2-1-2) タイ…「象+鳥」の力で飛翔する…タイの葬儀山車

東北タイで生まれた、奇想天外な葬儀山車のデザイン。威厳にみち、豊穡と吉祥をもたらすと信じられた巨象の頭部と、五彩にきらめく翼と尾羽をもつ神の鳥・ハンサが合体し、融

合して生まれでた、靈鳥・ハッサディーリン(写真1・2右)。

「ハッサディーリンのメル塔」は、この世で徳を積んだ高僧の靈魂を天上世界に連れ還るといふ、上座部仏教の死生觀を象徴するラーナー文化特有の、葬儀塔のデザインである。

タイの東北部にひろがるラーナー文化とラオスのラーナー文化は、東南アジアの中でも類を見ない独自の伝統を保有する。16世紀にはじまるハッサディーリンのメル塔の建造も、その一つである。

高さ約20メートル、基壇の幅約30メートル。背の上にそびえる葬儀塔には、人びとの信望を集め、徳をきわめた高僧の遺体が安置される。巨大な山車は、美しい読経の響きに包まれて茶毘に付され、死者の魂を乗せた飛行船となって、天上世界へと旅立つ(写真4)。

ふわりと空中に浮かぶ白雲を連想させる象。五彩の翼が天上世界への飛翔力に結びつく鳥。二つの靈獣の力がしっかり加算され溶けあつて、この世とあの世を垂直に結びつける想像力あふれるユニークな葬儀山車が生まれでた。

## 2-2) 「宇宙を戴く」。バリ舞踊「ジャウク」の冠…

今年度の科研・挑戦萌芽研究「東南アジアの祭礼文化における冠物(かぶりもの/頭飾り)の比較研究」に関する研究会として、「バリ島のジャウク舞踊」の講演と実演を開催した。

バリ人の舞踊家(ニョマン・S)による「ジャウク(ほか)の踊り」の実演を鑑賞するとともに、衣装・仮面・ジャウクの冠の解説(静岡文化芸術大学/梅田英春教授)等のレクチャーを受けた。本研究会は一般公開し、土地靈鎮めの踊りとして靈的な力をもつジャウク舞踊の本質に迫る研究会となった。

### 2-2-1) 「Gelungen」は「頭飾り」。「冠」を指す…

バリ語で「Gelungen」という言葉は、「頭飾り」または「冠」を指す。バリ伝統芸能では、役者が異なる衣装や冠を身に付けて、王、僧侶、大臣といった主要登場人物に扮する。Gelungen というのはジャウクの踊りで、僧侶が冠のことである。「ジャウク」の舞踏では、大臣、前大臣、王、王妃等、登場人物によって冠を使い分けている。

### 2-2-2) ジャウクはバリ島の仮面舞踊の一種である…

この舞踊は、畏敬の対象でもある魔物や、悪魔の所作を起源としている。大きく丸く見開いた目を持つ仮面には、白を基調とし、前歯だけを見せるマニスと、口を開き、上下の歯と舌



写真1 左: バダ葬儀塔 右: ハッサディーリンのメル塔



写真2 靈獣の意匠が集合するバダとメル塔(葬儀山車)



写真3 炎で遺体を焼き尽くす雄牛形の柩



写真4 左: メル塔建造許し儀式 右: 死亡粧を終えた遺体はハッサディーリンの内部に安置し、火葬に備える

を覗かせる、赤い仮面のクラスの種類があり、踊り方も異なっている。衣装は「バリ」の踊りとほぼ同じであるが、特徴的なのは、その指先であり、魔女ランダのように、長い爪をつけた白い手袋をして踊る。

2-2-3) 僧冠の造形は、全世界を象徴する…

Gelungen (僧冠) は、我々の世界が「三界一すなわち下界、中界、天界」に分かれているのと同様に、3つの層に分かれている。写真6で見ると、この冠には、上・中・下の3層がある。上部の形状は天国に昇るような曲線であり、キリスト教、イスラム教、その他の宗教や王国の国王の冠にも見出される。

2-2-4) 花咲く宇宙山、八方位を示す分割…

ジャウクの僧冠はシヴァの僧冠の造形である。影絵人形劇でも、シヴァ神の僧冠は、この形をしている。シヴァ神は変身することができ、魔的な力を示すこともある。

シヴァ神が魔神へと変身すると、目を大きく見開き、爪は長く伸び、まさに写真5で見えるジャウク舞踏のようになる。だが、顔が変わっても僧冠はそのままである。

冠の頂点へととどく4本、あるいは8本の分割線は方位を示す線である(写真6)。1、2、3、4の線が中央に向かって、すなわちシヴァ神に向かってせりあがっている。

この僧冠は「Candi KuSuMa」と呼ばれている。Chandiとは、「寺院」の形、「山」のような形で、KuruMaとは「花」のことである。花の寺院、つまり「蓮華寺院」を意味している。僧冠は宇宙の象徴であり、その装飾や形状は月、太陽、山、樹木等、宇宙を構成する様々なものを表している。

2-3) バリ島の影絵人形芝居「ムナラ・ギリ(乳海攪拌)」物語

アジアデザイン多様性を学部生や一般にも広く啓蒙する活動として、2016年1月には、昨年度に引き続き、今年度は「ムナラ・ギリ(乳海攪拌)」物語というテーマでバリ島の影絵人形芝居公演を企画した(写真7)。巨大な亀が支える世界の中心須弥山に巻き付く巨竜バスキを神々と悪魔が引き合い乳白の海を攪拌する。不死の妙薬、聖水「アムルタ」の生成、乳海攪拌をめぐる神々と悪鬼の物語である。

影絵人形芝居の物語は6部構成となる。

1. 悪鬼を待つ神々。
2. ヴィシュヌ神と悪鬼王プルチンティの会見物語。
3. 大亀の背に須弥山を乗せる。
4. 乳海攪拌が始まる。
5. ヴィシュヌ神の策略と新たな戦い。
6. プルチンティ



写真5



写真7



写真6

写真5 バリ島のジャウク仮面舞踏 写真6 マンダラを模すジャウクの黄金の冠。写真7 上演中の影絵人形芝居「乳海攪拌」の子、カララウの首。

梅田英春教授(静岡文化芸術大学)が率いる「ワヤン・トゥンジュク梅田一座」によるバリ・ワヤン公演は、演者の水準が高く、非常にインパクトがあった。アジア文化に対する興味喚起、発想の刺激をあたえる機会となった。

3) まとめ

東南アジアの冠物には、「命」を頭に乘せる根源的な世界観が表されており、それはバデとハッサディーリンのメル塔の葬儀山車と同様、宇宙の働きの象徴(宇宙山模型)と捉えることができる。次年度からは山車研究の延長として、東南アジアの祭礼文化に見かける「冠りもの」に眼を向ける。

アジアの各地の祭礼文化が示す豊かな「冠りもの」の造形手法、象徴、意味などとの関連を探りながら、山車に盛り込まれた造形語法と「冠りもの」の造形語法の比較研究を予定する。(文責 黄 國賓)

注1 一般公開シンポジウム等の開催日

2-1): 2015.9.16、2-2): 2015.11.7、2-3): 2016.1.30

会場: 神戸芸術工科大学クリエイティブセンター 2F